

られている。

- 中学生や高校生のハードな部活練習や土日の大会が子どもたちに幸せをもたらすか。子どもの権利やアスリートの権利が言われるようになってきたが、子どもの笑顔を守るために今何を大切にすべきなのかを大人が本気になって考え取り組むべき時にきている。

【石沢委員】

- アートプロジェクトでは、賛同してくれる仲間の存在が不可欠。異なるバックグラウンドのメンバーと共に目標に向かって試行錯誤することによって自分自身の能力に気付く面白さがある。また、アートの現場では、完成した作品だけでなく制作過程における一人ひとりの学びや気づきが重要。近年、教育でもプロジェクト型の学びが注目されている。
- 学校をどれだけ考え直せるかが問われている。興味や関心を引き出す仕組みを構築できるか。地域の人との協力を得ることで教員の授業とは異なる視点から学ぶことができたり、子どもたちが授業や先生を選べる柔軟な環境があってもいいのではないか。
- オンラインの学習ツールや自宅でのリモート学習など、学ぶ方法に自由度があってもいいが、実際に集い、体を動かしたり声を出して対話したり、自分の感覚・五感を使うことによって学びが深まると考えている。山形は豊かな自然環境を活かし、五感を使った協働的な学びが可能。
- 幼児期からの学びでは、自分自身を大事にしながら、あなたも大事だよと相手を認められる関係性、関わりを積み重ねていくことが大事。芸術プログラムでも個々の声や考えに耳を傾け、何を考えているのかを探るプログラムがある。全員がどうかや多数決ではなく、一人ひとりの考えを聞くことができる時間があるとよい。そのためにも現場に余裕、余白が不可欠。
- 朝日町で桃色ウサビとして活動している佐藤恒平さんは、オフィスを朝日中学校に構えている。学校と地域の間地点で子どもたちに学びの場を提供したり、先生方の相談に乗っている事例は参考になるだろう。

【末永委員】

- 幸せな集団を作るために、組織内の人間関係の質を向上させていくと、コミュニケーションの質が高まって、その結果としてそれぞれの幸福や会社であれば生産性の向上につながっていく。
- これまでプロジェクトベースで仕事をしてきた経験を振り返ると、成功するプロジェクトでは、チームメンバーのコミットメントが高く、メンバー同士の関係性が築かれており、それぞれ主体性があることで役割分担もうまくいっている。一方で、チーム全体の主体性が低く、停滞が生じると失敗してしまうケースが多い。これは、どんな集団組織にもいえる傾向。
- 学校も「主体性」が一つのキーワード。学級や学年、遊び仲間など、学校にも様々なレイヤーがある中で、関係性の質を高めて集団のウェルビーイングをいかに向上させるかは難しい課題。

【高井委員】

- 学びに対して興味を持つことは本来備わっているはず。興味を持てば主体性は生まれるが、いきなり主体性を持てと言われてもハードルは高い。
- 学習性無力感は、学習や経験によって自分で対処できない体験が積み重なり、面倒くささややる気の低下につながってしまうもの。習熟度別指導やクラス分けの是非はあるが、習熟度別指導が学習性無力感をなくす一つの手段になるのではないか。興味を持ったりスタートを切るタイミングがいつでもあるということが主体性や踏み出す力につながるだろう。主体性や踏み出す力は、大人になってからこそ重要。これらを訓練、練習しておけば、社会に出てからもどこからでもスタートが切れるようになる。
- 自身の会社内で部署横断のプロジェクト委員会の活動を過去に3年ほど行った。組織内のフラットな関係の中で新たな発見があるだろうし、達成感を感じさせたり、組織取り回しの経験などを積ませたかったが、委員長にだけ負荷がかかるなどの状況もあってうまくいかなかった。失敗も経験と考えているし、企業であれば中長期的に試したり、その後のリカバーも可能だが、教育現場では、試行的な取り組みを行った際のリカバーのチャンスがあまりないことが、教員に大きな責任を感じさせているのではないか。

【玉井委員】

- 教育においては、ウェルビーイングを発揮できる環境整備が重要。大学教育でもその重要性を実感しているところ。
- 日本を担う人材を育成するには、学生それぞれ個性が多様であることを認識させ、前向きにいい方向に考えさせる必要がある。
- 今の学生は、昔ほど排除の論理がない。男女、国籍などを問わず、分け隔てなく人と付き合う印象がある。
- 日本国内に300万人の長期滞在の外国人がいる中、ウェルビーイングを考えることは日本全体に資する。国際化が進む中でよりよく生きていくためにはどうしたらよいかということをもっと考えなくてはいけない。

【寺脇委員】

- 前近代では教師が教育の源泉だったが、90年代以降にはラーニングマネジメントシステムが登場し、独学が支援され、教育が大衆化し、質の向上や安定化が求められるようになった。
- インターネットとクレジットカードがあればどこでも質の高い教育が受けられる時代において、ウェルビーイングの実現に向け、主体的な学び、教室以外の学習環境の選択肢、探究学習やSTEAM教育をいかにするのか。
- 学ぶ人だけではなく、教える人やサポートする人も含め、多様な人材の協調が必要。
- 7教振の策定は、学校現場のみならず、山形という集団のウェルビーイングにつながるだろう。
- 技術の進化により大規模言語モデルが登場し、詰め込み教育が不要になる中で、イノベーションを起こせる人材の育成が重要。

- 学びの場は学校だけではない。社会で多様な人と一緒に学び、そこで得たものを社会に還元する、それが社会全体で学ぶことであり、ウェルビーイングに繋がるものと思う。

【内藤委員】

- 企業や経営者であれば、理念やビジョンを達成するために、いかに具体的なアクションに落とし込めるかが大事。今回の7教振の策定に当たっても、子どもたちや保護者、教員、現場の末端までウェルビーイングという大きなビジョンを達成するために、明日からどう行動したらいいかをイメージできるような具体を示していかないと行かない。
- 耳障りはよくないが、親ガチャなどいろんなガチャが話題になった。学校や先生にも当てはまることであり、子どもや親は、先生を選べない。そうした点も含め、学校の在り方を考える必要がある。
- 日本、韓国、アメリカで事業展開をしている Coloso (コロソ) というサブスクリプション方式でビデオオンデマンド (VOD) 形のオンライン教育サービスがある。今回、私自身もデザインやブランディングについて講座を開くことになった。会員数は30万人を超えており、デザイン、料理、音楽、プログラミングなど700を超える講座から、自分の興味関心に応じて学ぶことが可能。今後ますます学ぶ場所や講師を自分で選び、好きな学びを得ていく時代になる。山形県でVODサービスをやってくれとは言わないが、学校だけではなく外でも学べる場をどんどん増やしていかなければならない。

【中西委員】

- 自分の幸せを自分で掴み取れる人材に育ててほしい。幸せな状態は個人によって異なるが、大人は比較的自分の幸せを客観的に認識できる。教育においてそうした能力を育て、自分の幸せに向けた選択や行動ができる人材を育成する必要がある。小さなうちから経験していないと、大人になってから急にはできない。
- 内発的動機付けや好奇心が重要。勉強だけでなく様々な機会を通し、色々な選択肢の中から、自分が頑張れることや努力できることを見つけ、行動する経験を積み重ねることで、学び続け、自分で幸せな状態を目指せるようになるのではないか。
- 自身の会社に養護学校を卒業した社員が何人かいる。得手不得手は各々異なるが、それぞれの得意なことを会社側でも把握し、それを生かしながら活躍してもらっている。社会に出たときにどういう役割を担えるのか、自分が頑張れることを社会に出てどう生かせるかを自覚し、学生のうちに経験する場が必要。そうした中で、人との違いを個性として認め合えるようになればと思う。
- 学生だからとりあえず勉強すればいいということではなく、学んだ知識をどういう場でどう生かせるか、自分はどうなりたいからこういう知識が必要だから勉強しようとか、子どもたちにはそうした認識を持って育ってもらいたい。
- 社会で実際に使える英語の教育が必要。何年もかけて学んだ英語が社会に出て使えないのはもったいない。使えない英語ではなく、本当に使える生の英語だけを学ぶのでも十分ではないか。

【藤川委員】

- 約2週間のデンマーク視察で、フォルケフォイスコーレ(17歳以上向けの全寮制学校)やエフタスコーレ(15歳から17歳を対象とした全寮制学校)など6~7校を視察し、ウェルビーイングにつながりそうなヒントを得るなど非常に感銘を受けた。12月20日、オンライン7カフェで報告会を開催予定。
- 小さい地方は何も動かなければ淘汰され、私達らしさが奪われるだろう。デンマーク視察を通し、山形という地方の大きな希望、ポテンシャルを感じ、あるべき県の方向性などを考えたところ。
- 熱のある人からまずやればよいという矢野委員のお話に非常に共感している一方で、熱量がある人を見つけることの難しさも感じる。7カフェ参加者の熱量に驚くが、そのモチベーションはどこにあるのか。
- 12月26日、教育現場のウェルビーイングをどう作るかをテーマに、様々なゲストを迎えて遊佐町でイベントを行う。教員にもぜひ参加してもらいたい。

【三浦委員長】

- 矢野委員の解説にあった「関わり」と「繋がり」について、これまでも学校、家庭、地域をきちんと視野に入れて教育振興計画を作ってきたが、我々が行ってきたものは、まだ「関わり」のレベルにとどまり、「繋がる」ところまで達していないのかもしれない。
- 「リスクモード」「発展モード」について、「発展モード」の子どもたちを育てるべく取り組んでいるが、システムとしての学校自体は基本的には「リスクモード」を大事にしていかなければならないと思う。教育振興計画自体も「リスクモード」の部類に入るかもしれないが、いかに「発展モード」を取り入れて計画化していけるかが大事。

【村山委員】

- 「ひがしねあそびあランド」では、子どもたちが自分の責任で自由に遊び、大人は子どもたちが試行錯誤する姿を見守るということを大事にしている。子どもが自ら遊び、育つ環境を、保護者の主体性を奪わずに共に築くプロセスが大切。
- 教育は学校の中だけで行うものではない。子どもが育つためには、学校、家庭、地域の3つがそれぞれの役割を担うことが必要。
- 現代社会の効率化志向が子育てにストレスを生んでいる。大人に余裕がない中で、子どもたちのウェルビーイングは実現しない。情報過多の社会で迷い混乱する親が多いが、シンプルな子育てを提案している。
- 子どもの自己肯定感云々を言う前に、大人がどうなのかを考える必要がある。子どもだけに自己肯定感を求めるのではなく、まずは大人がいろいろなことに挑戦し、仮に失敗してもどうやったら課題解決できるかという姿を見せることが、子どもたちにとって生きた学びになるだろう。

【矢野委員】

- 今日解説でお話ししたことは、教育現場、教育の考え方にも取り入れられるもの。
- 教職員のウェルビーイング向上は大きな課題。生徒や子どもへも大きな影響を与える。

- アリストテレス以来、ウェルビーイングは最上位の目的と考えられており、教室、教材、学校行事など全てをウェルビーイングの観点から捉える必要性がある。
- ウェルビーイングの視点で、様々な活動を問い直していくことが必要。全部はできないので、優先順位をつけつつ、地道に時間をかけて浸透させる。一律にマニュアル通り、みんなが同じようにやれというのはウェルビーイングとはあまり合わない。温度の高い人々の熱量をうまく生かして活動全体を前に進めていく。
- 先生も生徒もある程度の余裕や遊びがないと、やらなければならないことだけを間違えないようにやるという「リスクモード」の状態となり、非常にバランスが取れていない状況になる。「リスクモード」「発展モード」の両方が必要であり、常にバランスと調和を問い直す教育の現場や学習の仕方を考えていることが本質論。

【小関教育委員】

- 政府において人生 100 年時代をどう生きるか議論が行われているが、教育現場においても避けて通れないのではないかと。健康である程度の歳まで生きられることを前提にライフプランニングを見直す必要があり、7 教振のテーマの 1 つにあってもよいのではないかと。

【工藤教育委員】

- 教育には、学校教育、家庭教育、社会教育の 3 つの柱があるが、時代の変化に対応しながらこれまで以上に役割分担をクロスオーバーさせ、よりしっかりと連携していく必要がある。
- 大人がいかに積極的に子どもたちの学びに深く主体的に関与できるか大事。

【和田教育委員】

- 人と人が同じ方向を向いて共通の目標に向かって幸せを追求することが、本当のウェルビーイングであり、これからの教育が向かう 1 つの方向。
- 現代の子どもたちは即座の成果を求めがちで、すぐに成果が出ないものはやりたがらない傾向があるように感じる。なぜ学ぶのか、自分たちが今学んでいる理由は何か、疑問を抱く子どもたちが多い中において、学びの先には幸せがあり、豊かな生活が待っていることを感じることができる教育現場であってほしい。

【丹治教育委員】

- 子どもが子どもらしく過ごす時間は重要。周りにいる大人が幸せを感じる生き方ができていないと子どもにも伝わらない。
- 多様性の尊重やインクルーシブ教育とは言うが、現場での課題は多いと想像でき、理念と仕組みとのずれが生じてきているのではないかと。今こそ変わる時と思う。
- 全ての親や大人は子どもの幸福を願っている。子どもが大きくなった時に、生まれてきてよかったと思える環境、社会、地域を作っていかなければならない。